市民力かわら版

第２号
平成１９年１１月１５日
編集/市民力かわら版編集委員会
発行/矢板市秘書政策室
電　話：0287-43-3764
ファクス:0287-43-2292
Eメール：
yaita@city.yaita.tochigi.jp

特集

プレ矢板市制施行５０周年記念
つつじの郷やいた花火大会２００７

十月二十日、秋の澄んだ漆黒の空に美しい花火が打ち上げられた。轟く花火の音と共にたくさんの歓声があがり、フィナーレには何処からともなく拍手がまきおこった。大会本部を中心に広範囲にわたって観客が集まり、市内はもちろん周辺市町をはじめ、他県からも熱烈な花火ファンが駆けつける大会となった。矢板がこれほどにぎわい、活気に溢れた出来事は久しくあっただろうか。

今回の花火大会はまさに「市民力」が土台となって成功を収めたイベントである。今年初め市内の経営者の仲間が「市制５０周年を迎えるにあたって、市民が持てる力を集合させ、その力を市に還元し、矢板が元気になる何かをしようじゃないか」と声を発したことが始まりで実行委員会が発足した。大会会場の選定には時間を要した。観客の中には「なぜ秋に花火？」と思っていた人もいただろう。矢板には大きな河川敷は無く、稲刈りの済んだ田んぼを地権者の方々の協力で会場として提供してもらうことに決定したからだ。大会運営資金は、市内企業をはじめ商店街に呼びかけ協賛を募り、また人から人へと声を掛け合い個人二千円一口から寄せられた協賛で賄われた。全ての方に呼びかける事が難しく、告知が行き届かなかった事にも課題点が残ったという。それにも拘らず大会後「来年はぜひ声を掛けてくれ。協賛するよ」といったうれしい意見も寄せられたそうだ。

来年は市制５０周年本番。来年もまた素晴らしい花火をと期待している人も多いだろう。参加する形態は様々である。協賛もあるが、ボランティアスタッフの募集も行われていた。自分の持てる「市民力」で矢板の元気の一端を担ってみるよい機会かもしれない。

矢板の花火師

今回の花火は全て矢板市扇町の株式会社金太郎　煙火部によって打ち上げられました。社長の渡邊和久さんは根っからの花火好き。一般に売られている花火を用いて演出し、楽しんでいたのが高じて花火師になられたそうです。そしていつしか周りには花火好きの仲間が集まり、現在では矢板市内だけで１８名のメンバーがいるそうです。普段はそれぞれに職業を持つみなさん。「自分で打ち上げてみたい」その思いで集まった方ばかり。

最後の花火、スターマインは皆さん思わず手を叩いて興奮の中で空を見上げていたと思います。構成・演出はすべて渡邊社長が行います。高低差を付け、何種類もの花火を同時に上げることによって、あの美しい絵が出来上がるそうです。斜めに交錯するように飛び出し、紫の鮮やかな花火は、渡邊社長が花火製造者と幾度も試行錯誤を重ね、今回はじめて完成したそうです。この花火大会後も「仲間に入りたい」と声が寄せられているそうです。矢板の花火師達の花火への思いが大きく動いて大会が成功を収めたといえます。

市民力かわら版の愛称を募集中！

編集委員会ではかわら版の愛称を募集しています。あなたにとって矢板をイメージするような、素敵な愛称を、どしどしお寄せください。
ハガキ、ファクスまたはＥメールで
矢板市秘書政策室
（〒329-2192 矢板市本町５－４）迄

川崎城跡からの観覧感想記

川崎城跡公園再生市民会議代表の鈴木幸市さんに城山からの花火の印象を聞いてきました。

見物人は３０名ほどいましたがほとんど宇都宮方面からの人だったそうです。

城山からの眺めは、町の夜景と花火の光との競演といってよいものでした。城山の本丸は平地から７０メーターの高さになります。低く上がる花火は地表から湧き上がるような光と音でした。中ほどに上がる花火は目線にあり、落ち着いて色彩を読み取り夜景とマッチした瞬間を味わいました。天空高く上がる花火は、やや頭を上げての鑑賞で平地から見るよりも疲れないと思います。頭上での大輪の花火はそのさく裂音と共に、わが身に覆いかぶさって来る感じがしましたと、花火の感動を伺ってきました。